

「君は、あちこち飛び回っているけれど、この先どこで就職して腰を落着けるつもりなんだ？」と聞かれることがある。そんなとき僕は、半ば冗談半ば本気で「新潟以外なら、世界中どこでもいい」と答えている。

ダグラグ村の長老に聞かれたことがある。「おまえは、なぜここにやってきたのか知ってるのかね?」僕は、「アボリジニの文化と歴史を学びたかったからです」とこたえた。しかし、

生命

あふれる

大地

アボリジニの世界

保莉 実

□15□

とはいえ、新潟が嫌いなのかといえは、そう単純な話でもない。こうして新潟日報に連載したのも、故郷の新潟に特別な思い入れがあるからだ。この感情は、〈愛憎〉としか言いようがない。ふと、坂口安吾を思い出す。彼も新潟に対して、

この老人は僕の目をじっと見つめると、「大地がおまえをここに呼んだんだよ」と言い、声をたてて笑った。アボリジニの大地、この生ける大地を前にして、僕が持ち出す〈訪問の理由〉などあまりに無力だ。「大地が正しい道を教えてくれ

世界は地続き

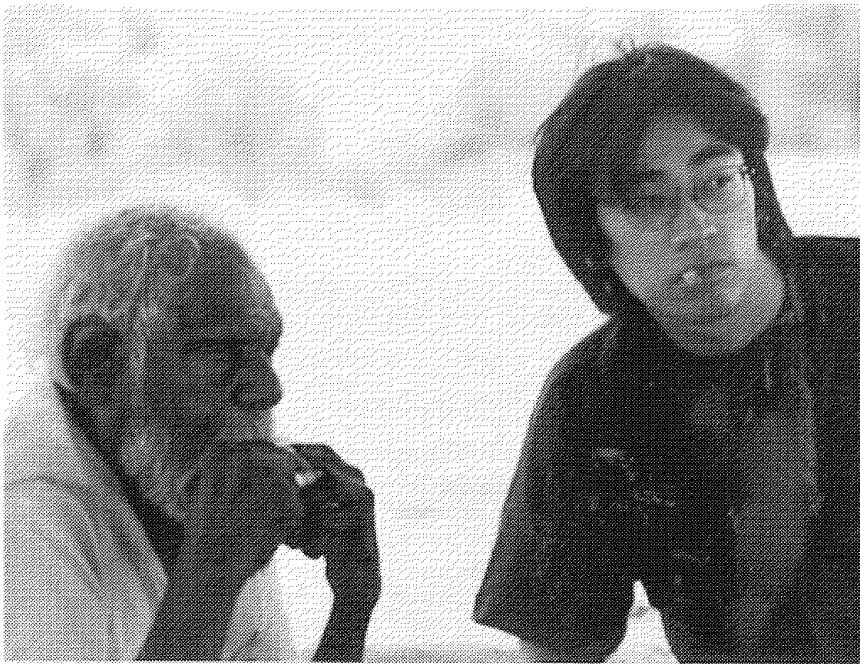
相互依存と繋がりを実感

「彼は、繰り返しそう語っていた。大地が語る声を耳を傾けること——このあまりにも困難な課題を前にして、自分がまだまだア

究して何かの役に立つので「生命の大地—アボリジニ文化とエコロジー」(平凡社)という本を翻訳した。エコロジーや先住民文化に興味をもっている方に、ぜひ読んでもらいたい。

例えば、環境問題という地球規模の課題ひとつとってみても、アボリジニの人々から学ぶべきことはたくさんある。「最先端」や「超大国」だけが、世界を支えているわけではない。

最後に、二十一世紀を担ってゆくはずの新しい世代に向けて、とはいえ何よりも僕自身のために、連載の第一回に記した言葉を繰り返しておきたい。「人生はな



村の長老とともに (写真提供・内田真弓)

ボリジニの世界から学びきれていないと感じる。

日本でも、オーストラリアでも、「何でアボリジニなんです。そんなこと研究して何かの役に立つので

てくれない。ましてや「世界をより良くするためです」なんて言う、もっと納得してくれない。

良くなくなってゆくはずもない。日本社会が

アボリジニの大地と故郷の新潟、シドニーと東京、オーストラリアと日本を何

デボラ・B・ローズ著

の歴史学者—新潟市出身)

度も往復しながら生活していると、世界は地続きで、相互に繋がっていることをあらためて実感する。

アボリジニ社会にもグループ間の境界線があるが、それは相互に依存するためであってお互いを排除するためではない。グローバル化の時代、僕たちは、その気さえあれば世界の中心と周縁を、大都市と地方と辺境とを頻りに行き来することができる。将来はパースポートなど必要なくなつて、新潟から長野に向かうように世界各国を訪問できるようになればいい。

最後に、二十一世紀を担ってゆくはずの新しい世代に向けて、とはいえ何よりも僕自身のために、連載の第一回に記した言葉を繰り返しておきたい。「人生はな